

---

# 銀色の狭間 (パラレル)

かわ ひらこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀色の狭間（パラレル）

### 【Nコード】

N5219M

### 【作者名】

かわ ひらこ

### 【あらすじ】

2010年9月30日、完結ボタンを押しました 拙作「銀色の狭間」のパラレルを書いております。全10部3作のオムニバス形式、本編を読んでいない方でも支障なく読める仕様となっております。内容は現代恋愛ものです。

## 赤の章 「一夏」 1

雨の日の週末、金曜日。

それは、憂鬱であるとともに、一種の開放感をもたらす。

買い物帰り、店を出た私はバッグからオレンジ色をした無地の折り畳み傘を取り出すと、それをばさりと広げた。

母が倒れて、仕事を辞めて実家に帰ってきた私は、こういう日を自分で作ってちよっとだけ息抜きをする。

仕事をしているわけでもないから、金曜日の週末にこうやって出かけられることに対して優越感に浸れる反面、ちよっぴり罪悪感もあるのだが。

買い物は自分の好きなものを買う。

商品を選んでいるときは、わずらわしいあれこれから自分を解放でききる。

好きなものを買って、気分を一新して、また母の介護に向かうのだ。

帰り道の途中、見慣れないペットショップが目に入った。

新しく出来たのだろうか。

ちよつと寄り道をすることにした。

その前に佇み、見るともなしにガラスケースの中にいる子犬や子猫たちを見る。

よく見るとそのペットショップは少し変わっていた。

その店には売れ筋の子犬や子猫は全くといっていいほど置いていなかったのである。

その代わりに、ハスキー犬のような大型犬の子犬や、金茶色をした猫科の子供、カメレオンに蝙蝠の羽の生えたような奇妙な爬虫類などが陳列されていた。

そうだ、犬といえば、ゴールデンウィークに拾ったあの犬。

元気にしているかしら。

あの犬と過ごした5日間は、私にとってかけがえのないものとなっている。

ガラスケースの向こうにあの犬によく似た銀の子犬を見つけ、私はふつと微笑んだ。

「おねーさん、なにか飼うの？」

その声に後ろを振り向くと、高校生ぐらいの男の子が立っていた。

ビニール傘を差したその少年は塾帰りには見えなかった。

真っ赤な赤毛を逆立て、耳にはピアスを左右二つずつ開けている。ワイシャツの裾を出し、擦り切れた鞆を持ち、チエックのズボンにローファーを履いたその少年は、本来ならばこの時間には家に帰っていてもおかしくないはずだった。

服装からするとテレビドラマの「ごくせん」に登場しそうな彼は、人懐っこそうな笑みを浮かべて私を見つめた。

よく見ると薄くそばかすの浮いた顔は目がくりくりとじていて愛嬌がある。

「君はなにか飼うの？」

私は彼に聞いた。

「うーん、俺んちはマンションだから動物飼えなくってさ。ねえ、おねーさん、こんなところで出会った俺達ってなんか運命感じゃない？ アドレス交換しようよ」

今の若い子って軽いのねえと思いつつ、私は丁寧にお断りした。

「ごめんなさいね、私、嫉妬深い彼氏がいて、ほかの男性とアドレス交換すると焼くのよ」

嫉妬深い彼氏なんてもちろんいないけれど。

「えー、そんな奴と付き合ってたの？ 別れなよー」

「優しくていい人だから、君が心配しなくっても大丈夫よ」

「そういう男は信用できないね。おねーさん、いい人そうだから騙されてるんじゃない？」

「はいはい、ご心配ありがとうございます」

「うっわ、子供扱いかよ、俺ちょっとへこむなあ」

くすくすと笑う私を見て、苦いものを口にしたような顔をする彼。

「それじゃあ、またね」

「えっ、おねーさん、もう行っちゃうの？　じゃあ、せめて名前だけでも教えてよ。俺、

友人からはルウって呼ばれてる。閩に生まれたから」

焦ったようにいうその彼を見て、私はふっと笑った。

多分もう会うこともないだろうと思いついて、自分の名前を告げる。

「おばさん」「じゃなくなつて、ちゃんと」「おねーさん」と呼んでくれた彼にちょっとだけご褒美をあげよう。

「私は杏奈っていうの」

「杏奈さんね。わかった、ありがとう。忘れない」

そういうとルウはにいつと笑ってペットショップをあとにした。

ルウという不思議な少年と出会ってから一ヶ月、母は順調に回復してきた。

私はまた買い物に出かけた。

今度は母がお見合い話を持ってきたからだ。

母には悪いけれど、私にとってはありがた迷惑だ。

正直、一人でいるほうが楽だと思っている。

誰にはばかることなくだらしない格好が出来るし、好きなときに寝て、好きなときに起き、好きなものを食べ、好きなことをする。

なんてパラダイスなんだろう。

結婚するということは相手の家との繋がり、親戚関係、ご近所付き合い、子供、ママさん友達、そういった先のことがうつすらと見えていて、一人でいるほうが気楽な私にはどうしたってしり込みしてしまう。

世の母親という人達は、私からしたらすごいことをやっているんだよなあと思いつながら道を歩いていると、またあのペットショップの前に来ていた。

ガラスケースを見ると、わりかし売れているようで空白が目立った。

あの銀の子犬はというと、幸か不幸かまだ売れ残っていた。

ころころとしたその子犬は、ケースのなかで丸くなって眠っている。規則正しく上下する子犬のお腹を見ているうちに、だんだんまどろんできた。

「あれ、杏奈さんじゃない？」

その声に振り向くと、あのルウという赤毛の少年が立っていた。

「また会えてよかった」

そついうとルウはこちらにやってきた。

私の隣に立つと、ルウはガラスケースの中を覗いた。

「こいつ可愛いよね、俺もずっと飼いたいなあって思ってたんだ。でもそれって無理だからさ、こつやって毎日見に来てんの」

「そつだったの」

「……実は半分嘘で半分本当。俺さ、また杏奈さんに会えるかと思つて、毎日見に来てたんだ」

「あら、そつなの」

無感情な返事で返すと、ルウは慌てたようにいった。

「うわ、杏奈さん信じてないでしょ！俺、あれから杏奈さんのことが気になっちゃってさ、学校でも上の空で、仲間から冷やかされ

てんだ」

「ふーん、それは結構なことだ」

私のその返事を聞いたルウはむっとした表情をした。

「杏奈さん、俺のこと馬鹿にしてる？ これでも結構本気なんだけど」

「君、私のこと幾つだと思っているの？ 多分君より十歳は年上よ？」

私がそういうと、ルウは剣呑な表情になった。

「そうやって大人のふりする杏奈さんは嫌いだよ」

そういうと、ルウは私をガラス窓に追いやった。

両手を私の頭の横につき、じっと私の目を見る。

身長は170ぐらいだろうか、私より10センチぐらい高い彼は私を少しだけ見下ろした。

「これでもまだ余裕持てる？」

「ここは往来だから、人が来ると思うわ」

「ふーん、じゃ、本当に人が来るかどうか、試してみようか」

そういうとルウは私の顔に自分の顔を寄せた。

こつんと額同士が当たる。

「杏奈さん、いったよね、俺本気だった」

そう間近でいうと、ルウは私に噛み付くようなキスをした。

思わず目を見開いてしまった私をみると、ルウは勝ち誇ったような顔をした。

「じゅちそうさま」

そういつてペろりと自分の唇を舐めた。

「俺ね、杏奈さんが欲しいんだ」

かすれた声でそういうルウは、子供と大人の境界線上にいる危うさがあった。

「杏奈さんがどんな人でもいい、彼氏がいたって構わない。ただ、杏奈さんが好きだから」

そういつて間近で囁くようにされて、初めて自分がこの少年から本当求められているのだとわかった。

「どつして、なぜ私なの？」

思わずそう聞いてしまった。

年上との火遊び、一過性の感情、恋に恋する少年、そんな言葉が浮かんでくる。

だが、ルウの口から出てきた言葉は別のものだった。

「杏奈さん、悲しそうだったから」

「え？」

思わず聞き返す。

「杏奈さん、自分では気付いていないでしょ？ このペットシヨップの前でさ、この子犬見て悲しそうに笑ってんだよ？ 男ならそんな姿見たら誰だってほっとけないよ」

そういつてルウはぎゅっと唇をかみ締めた。

「杏奈さんのこと、守りたいって思った俺は変なのかな？」

「ううん、変じゃない。ありがとうね」

そういつて私はふつと微笑んだ。

私のその顔を見たルウは少しだけぽかんとしたあと、頭をガシガシとかいた。

「ったく、勘弁して欲しいよ。杏奈さんのそんな笑顔見たら、俺、後戻りできなくなっちゃうよ？」

「それでもいいんじゃない？」

私がそういうと、ルウは少し慌てたようにいった。

「あ、杏奈さんの彼氏はどうするの？ 嫉妬深い奴なんですよ？」

「ああ、それは……」

私が言葉を継ぐこうすると、ルウは獰猛な表情をした。

「もし別れるってことになったときにいつから暴力受けたら絶対に連絡してね。DVとか、俺マジで許せない派だからそいつとガチで喧嘩することになると思っけど、いい？」

ルウの本気の目に対し、今更嘘だとは言えない私だった。

「ええ、わかったわ、ありがとう。実はその彼氏とはもう別れているの。だから喧嘩はなしね」

「あ、もしかして、この前会った時って彼氏と別れたときだった？」

「え、ええまあ」

どうしよう、嘘の上塗りだわ。

でも、映画タイタニックでもローズがいつていたっけ、「女は、海のように深く、秘密を胸に秘めているものよ」って。

こうして、ルウと私の逢瀬が始まったのである。

あれから私とルウはアドレスを交換し、あのペットショップでたまに会ったりもした。

ルウは毎日メールをくれる。

介護の日々を過ごしている私にとっては、そのメールがだんだんと息抜きの時間となっていた。

たまのリフレッシュ日には、私は必ずあのペットショップに立ち寄った。

銀の子犬はまだガラスケースの中にいる。

この子犬、少しだけ、体格がよくなってきていやしないか。

売れ残りませんようにと思う反面、ずっとこのままの姿でここにいて欲しいとも思っている。

なんて矛盾した感情。

人はこうやって矛盾を抱えて生きていくのだろうか。

私がペットショップに立ち寄るときには必ずルウもやってくる。

いつものダルい服装で、ローファーを引っ掛けながら近づいてくる

姿に、我知らず胸がときめいている。

やあね、私ったら、年甲斐もなく高校生なんかと付き合ったりして、  
適当に仲良くして、適当に終わらせなければ。

「学校は？」

私がそう聞くとルウはえへへという顔をした。

「サボった」

そういつてにいつと笑うルウはどこまでも悪びれない。

「だめよ、ちゃんと学校に行かなくちゃ。親御さんが心配するわよ。  
はあ、もうメールの返信するのをやめようかしら」

私がそういうとルウは焦って返事を返した。

「それはマジ勘弁して！ 俺、杏奈さんと毎日メールしないと生きていけない体になっちゃってるから！」

しかしまあ、可愛いことをいってくれるじゃありませんか。

内心で微笑んでいると、ルウがいった。

「ねえ、杏奈さん、デートしようよ」

「デートねえ」

「杏奈さんが乗り気じゃないことぐらいわかるよ。お母さんのことが心配なんですよ？ でも、一日だけ、一日だけ何とかできないかなあ？ 少なくとも健全に5時で帰るとかして、なんとか杏奈さんの負担にならないようにするから」

そういつてお願いっ！ と手を顔の前ではちんと合わせるルウを見て、私は眉を下げた。

「うーん、やって出来なくもないけれど、自由に出来る時間は少ないわよ。それってルウはつまらなくない？」

「杏奈さん、俺さあ、今日学校でついに彼女が出来たってばれちゃったんだよ」

「まあ、そうなの」

「それで、一度もデートに行ったことないっていったら、周りの仲間から甲斐性なしっていわれちゃってさ。それだからってわけじゃないんだよ？ でも、杏奈さんとは遊びにいったことがないから、思い出として行っておきたいなあなんて思ってる」

「思い出？」

私がそう聞き返すと、ルウはうんと頷いた。

「杏奈さんはさあ、優しいから、俺とは情けで付き合ってくれてるんでしょ。そんなこと、杏奈さんをずっと見てればわかるよ」

「ルウ……」

この子、鋭いな。

「だから、杏奈さんとの思い出作りに、どこかに遊びに行こうと思  
って」

そういつてしゅんとするルウはなんだか子犬みたいだ。

日中ずっと空けるわけには行かないので、私は代替案を提示した。

「そう、それなら、いつそのこと花火大会なんてどうかしら？　夕  
方からなら少しだけ時間が取れるのだけど、どう？」

それを聞いたルウは、今度はパツと顔を輝かせた。

「花火大会か、うん、いいね。近い日にちだと7月25日に河川敷  
で花火大会をやるからそれを観に行こうよ」

「ええ、そうしましょう。私ちゃんと浴衣着てくるから」

私がそういうとルウは目を丸くした。

「えっ！　マジ？！　杏奈さん浴衣着るの？」

「ええ、そのつもりだけれど……歩くの遅くなっちゃうから止めと  
いた方がいいかしら？」

「ううん、全然大丈夫！　やっべえ、テンション上がったきた」

そういうとルウはうずうずし始めた。

「ふふ、浴衣がそんなにいいの？」

「『浴衣が』じゃなくて『杏奈さんの浴衣姿が』、だよ」

そういつてルウは照れたように笑った。

ルウは優しい子だから、あのキスから強引には攻めてこない。

けれどもその分、メールや電話で愛情を一杯ぶつけてくる。

ストレートなその感情は、微笑ましいぐらいだ。

祭りの前日、私はルウに電話した。

「もしもし？」

「杏奈さん？ どうしたの？」

「うん、ちょっと声が聞きたくなくてね」

「なんでそんな嬉しいことをいうの。俺明日の夕方マジでやばいかも」

「どづいづこと？」

「送り狼とかにならないように、精一杯紳士でいます」

「あはは、そんなこと心配していたの。でも、紳士でいてくれるっ

て頼もしいわ」

そう、頼もしい。

後腐れなく終わらせるには。

そう思っていると、電話口のルウの声が穏やかになった。

「杏奈さん、俺、あの雨の日に杏奈さんに出会えてよかったと、本当、心から思ってるよ。あの時杏奈さんに出会えていなかったら、こんなに楽しい日々を過ごすことが出来なかったと思う」

「どうしたのルウ、なんか湿っぽいわよ」

なんだか別れの言葉みたいだ。

「だってさあ、杏奈さん明日で俺のこと振ろうと思っているでしょ？ 餓鬼じゃないんだからそのくらいわかるよ」

見抜かれていた。

ここで変に取り繕ってもいけないと思い、私は正直に話した。

「ええ、そのつもりよ。ごめんなさい」

「うん、杏奈さんはずるいよね。俺今さあ、年上のおねーさんに遊ばれた可哀想な高校生のポジションだよ」

「そうよ、ルウは悪いお姉さんに引っかけちゃった可哀想な高校生なんだからね、でも明日もよろしくね」

そういつてふふつと笑う。

「ずるいけど、優しいんだから困るんだよな。それと、引っ掛けたのは俺の方だから」

そこは男の面子に関わるからとかなんとかいって、二、三言葉を継いだあと、ルウと私は電話を切った。

携帯を閉じて、ベッドの上にちよこんと座り込んだ。

「はあ、今時の高校生って侮れないわ」

明日は楽しい日にしよう。

赤の章 「一夏」 3

花火大会当日。

私は押入れから浴衣を引っ張り出した。

黒地に牡丹の柄で、帯は薄桃色。

2年くらい前に買ったその浴衣は、以前付き合っていた人と一緒に夏祭りに行ったときに着ていたものだ。

髪はアップにして、自分で着付けをする。

帯はインスタントで付けられるものだったので、それほど苦労はせずに身支度を整えることが出来た。

「じゃあ、お母さん、花火見に行ってくるね」

なんだか、年甲斐もなく浮き足立っている自分がいる。

相手は高校生だから、これって犯罪になりはしないかしらなどと危ぶんだのだが、今日お別れするのだから別にいいか、と変に前向き思考になった。

会場に着くと、ポーチから携帯を取り出して電話をかける。

すぐに繋がった。

「杏奈さん、着いたの？ 俺も今着いたとこ。河川敷の真ん中辺りにあるサッカーゴールの近くにいるから、わからなかったらもう一回電話して」

パチンと携帯を閉じると、私は人ごみを掻き分け、サッカーゴールへと向かった。

ルウの赤毛は遠くからでもよくわかった。

濃紺と白のストライプの浴衣を着て、携帯を覗きながらサッカーゴールの縁にもたれている。

浴衣着て来てくれたんだ。

あ、家を出るとき家族になんていったんだろう？

妥当なところで「友人と花火大会観に行く」よね。

そんなことを想像しながら、私はルウに近づいて声をかけた。

「ルウ」

呼ばれて振り向いたルウは驚きの顔を隠そうともしなかった。

「杏奈さん、それ、すげえいい」

「ありがとう。ルウもよく似合ってるわよ」

「杏奈さん和服似合うんだね。すげえ色っぽくなった」

そういつてルウはちよつと緊張したような表情をした。

「あー、俺がもうちよつと大人だったら杏奈さんと釣り合つものになあ。これじゃあ、近所のお姉さんと餓鬼だよ」

そういつて頭をガシガシとかいたルウを微笑ましく見つめると、私はルウに手を差し出した。

「会場混むから離れないようにね」

「えー、やっぱ餓鬼扱いかよ」

「違うわよ、私が離れないようにしっかり捕まえててね」

私がそういつとルウは困つたなあというような顔をした。

「杏奈さんずるいよね、天然でそういつこというんだもん」

そういいながら私の手を取るとルウはゆっくりと歩きはしめた。

ルウの手、意外にごつくて大きいのね。

屋台を冷やかかし、花火がよく見えるポイントを探しているとき、にわかには雲行きが怪しくなってきた。

ごろごろとなる空、むわつとするアスファルトの匂い。

「夕立が降りそうね」

私がそういうとルウは渋面を作った。

「えー、まだ杏奈さんと花火見ていないのに、神様も意地悪するなあ」

そういったとき、空からポツリと雨が降ってきた。

「げ、本当に降ってきた」

その雨は本当に夕立の前触れだったようで、雨脚はあっという間に強くなった。

すぐにざあざあとした降りになった。

突然の土砂降りに会場は軽くパニックになり、人が右往左往する。

「杏奈さん!」

「ルウ!」

そのときお互いがお互いを離すまいと、しっかりと手を握り、ルウと私は広場を駆け抜けたのである。

急な夕立にあった私達は、屋根を探して河川敷をさまよった。

「屋台や仮設テントはどこも人で埋まっちゃっているから、どこかお店でも探すしかないわね」

そうはいつでも河川敷の周りには民家しかない。

焦って周りを見回した私は土手の向こうにあるものを発見した。

「ねえ、あれ神社じゃない？」

見ると、青緑色のフェンスに囲まれた敷地内に小さな鳥居が立っているのを発見した。

二人でそちらへ行くと、小さいながらも屋根のあるお堂にたどり着いたのである。

「わあ、びしょびしょね」

「っあー、ひどい降りだったよね」

そういいながらルウは両手で髪をかきあげた。

オールバックになった髪の毛からはらりと一房落ちる。

髪形変わると意外に精悍な顔つきになるのねと私は感心した。

と、そのとき。

「つくしゅん」

ルウから可愛らしくしゃみが聞こえてきて、思わず頬が緩んだ。

「そうね、こんな格好していると風邪を引くわね」

私がそういつてルウを見ると、ルウの瞳に熱が宿っていることに気がついた。

「ねえ、杏奈さん、抱かせてよ」

「え？」

「風邪引かないようにさ、二人で温め合おうよ」

そういつとルウは私の後ろに周り、背後から私を抱きしめた。

「ちょっと、ルウ」

やんわりと否定の言葉を吐くが、実際は少し寒いなと思っていたところだったので、その提案にありがたく乗ることにした。

やっぱりわたしってずるいのね。

「杏奈さんも少し冷えてるね」

「ルウ？」

「今俺に出来ることをさせて」

そういつと、ルウは自分と私の身体をぴったりと密着させた。

「杏奈さん、柔らかい。それにだんだん温かくなってる」

「それはルウがくっついていてるからよ」

「俺のこと意識して温かくなってるんじゃないの?」

「じゃあそういうことにおきましようね」

「だからさ、杏奈さんがそうやって大人ぶるの、俺嫌いなんだってば」

ルウは私を抱いていた腕に力をこめた。

「杏奈さんのうなじ、いい匂いがする」

そついうとルウは私のうなじに顔を落とした。

肩口にルウの髪がはらりとかかる。

「あ、ルウ……」

瞬間、ぞくりとした感覚が背中を襲った。

ちゅつと音を立て、ルウが私のうなじに口付けたのだ。

たったそれだけなのに、なぜだかわからないけれど腰が抜けそうになる。

「ちゅつと……」

出てきた声はかすれた吐息にしかならなかった。

「杏奈さん、俺……」

ルウの鼻にかかったような声が甘ったるく聞こえる。

「やめてよね、こんなところで」

かすれた声で私がそういうと、ルウはさらに手を進めてきた。

顎を上向かせられ、唇をなぞるように食まれる。

息をしようとして僅かに口をあけると、するりと舌が侵入してきた。

顔を引こうとするが、意外に男らしい手に顎をつかまれたままだったので逃げることは叶わない。

くちゅり、と音が鳴る。

「ふっ……あっ」

どちらの唾液かわからないものをルウが舐め取り、体勢をずらしながらキスを喉元に落としてきた。

「ああ……」

私はもうかすれた声しか出なかったもので、歯を食いしばり、口を閉じていることにした。

ルウが私の胸に顔を埋める。

そしてそのままぎゅっと私を抱きしめた。

しばらくそのままの体勢でいたあと、ルウはあと長い息を吐き出した。

「……はい、ここまで。じゃないと俺、ここで本気で杏奈さんのこ  
と食っちゃいそうだから」

それは自分に言い聞かせるかのようで、でも私の胸から顔をあげず  
にルウは呟いた。

「あー俺、これからはもう年上しか見れなさそう。俺の人生狂った  
ら、杏奈さんのせいだからね」

そういつて私の胸から顔をあげたルウを、そのとき、私は本気で愛  
しいと思った。

「はいはい、ありがとうね」

そういつてルウの頭をぎゅっと抱きしめた。

「なに余裕ぶってんのさ、さっきは感じてたくせに」

「ルウ可愛い」

「なにそれ、格好いいっていつてよ、じゃないとまた襲っちゃうよ  
」？」

「はいはい、格好いいわね」

「心がこもってない！ もう一回！」

私は微笑みながら答えた。

「ルウ、格好いいよ」

「……もう一回」

「ルウは格好いいってば」

「ねえ、好きって言って」

「好きよ」

「俺も、ずるいけど優しい杏奈さんが大好きだよ」

ふと空を見ると、夕立は止み、瑞々しい空気が当たり一面を包んでいた。

ヒュルルルル。

遠くで花火をあげる音がする。

空を見上げると、タンポポのような花火が打ち上げられたところだった。

「うわあ、ここ、よく見えるわね」

「俺達、知らずに絶景ポイント見つけちゃったのかな」

二人で抱き合いながら、私達はその花火をずっと見つめていた。

あれからルウとは会っていない。

花火を見終わったあと、私は正式にお断りをしたのだ。

もしかしたら、ルウが大人になったときにまたひょっこり出会ったこともあるのかもしれない。

子供と大人の境にいた不思議な少年。

その危うい魅力にあるいは惹かれたのかもしれないわね。

あのペットショップはいつの間にか閉店してしまったようで、銀の子犬の行方はようとして知れなかった。

あの子犬、いい人の手元にいるといいんだけど。

私とルウを結びつけたペットショップはもうない。

だから私も前に進むのだ。

これは大切な、私の夏の思い出。

<了>

青空の章 「快晴」 1

天高く馬肥ゆる秋。

空を見れば、綺麗な青空が広がっている。

清々しい空気を胸一杯に吸い込み、私は大学の校舎内を歩いていた。

後期の授業は一通り出席した。

次は大好きな教養課程のヨーロッパ文学の授業なので、教室へ早めに行つてそこでお昼を食べようと思つている。

この授業は大学の端、第7棟で行われているので、校舎を繋ぐスロップを渡ることになる。

そこから見える景色は、まるで薄く色付いた木々たちがスロップの柱という額の中に納まっているかのようなのである。

「のどかよねえ。山の中にある大学だから季節の移り変わりが如実に体感できるわ」

山奥の大学ではあるが、私はこの景色を結構気に入っている。

それに第7棟の窓からは、外の景色が違った角度で見えるので、それがまたいいのだ。

「無駄に風流よね」

そう思いながら教室の分厚いドアを開ける。

と、教室には先客がいた。

教壇の近くで外の景色を眺めているのは、赤みがかった金色の髪を持つ外国人だった。

「あら、見ない顔だわ。どこの人かしら？」

私が入ってきたことに気付いたのか、その男性はこちらを向いた。

男性の瞳は秋の青空のような澄んだ色をしていた。

ジーンズに黒のVネックTシャツと革靴という簡素な出で立ちながら、それがよく似合っているのはやはり上背があるためか。

遠くからでもモデル体系であることが窺える。

男性は私の姿を認めると、一瞬驚いたような表情をしたあと、つかつかとこちらへ歩いてきた。

整った顔のその男性は私の前まで来るとそこで立ち止まった。

男性は私の顔をじっと凝視している。

そして、そこから動こうとはしない。

……な、なんですかこの沈黙は？

とりあえず、私は彼に声をかけてみることにした。

「May I help you?」

男性ははっと気が付いたかのように、気を取り直すと、口を開いた。

「瀬崎先生はここにはいらっしゃいませんか?」

なんだ、日本語喋れるのか。

しかもとても流暢だわ。

「ヨーロッパ文学の瀬崎先生ならば、このあと13時30分からの授業にいらっしゃいますよ。なにか御用ですか?」

「僕は短期留学生のフィリップ・フラウティスといいます。瀬崎先生にレポートの件で相談がしたくて待っていました」

そついいながら左手の腕時計で時間を確認する。

時計はフランクミュラーなところがちょうどいい外し加減だ。

「そつだ、あなたの名前を覚えていただけませんか?」

フィリップと名乗ったその男性は、私を青空のような真っ直ぐな瞳で見つめてそう聞いた。

「私は大良杏奈といいます。もしわからないことがあったらいつでも聞いて下さいね」

そういつてにこりと微笑んだ。

フィリップはなぜかまた驚いたような表情をすると、「はい」といって、扉を開けて出て行ってしまった。

「なんだったのかしら」

私は気を取り直して教室の右側の席に座ると、コンビニで買ってきた昼食を広げて食べ始めた。

程なくして、教室の扉が開く音がした。

「今日は授業前に人がよく来るわね」

そう思いながら昼食を食べ続けていると、私の背後に誰かが立つ気配がした。

気にせずにいると、その背後の気配が声をかけてきた。

「あの、杏奈さん、一緒にお昼を食べてもいいですか？」

振り向くと、先ほどのフィリップが皮製のバッグとコンビニの袋を抱えて立っていた。

「ええ、どうぞ」

私がそういうと、フィリップは椅子ひとつ分空けて私の隣の席に座った。

「フィリップさんは日本語お上手ですね」

「僕のことは呼び捨てで結構ですよ」

そう言うとフィリップは綺麗な笑顔をよこした。

知らず、胸が跳ねた。

最初は変な人かもと思っていたけれど、こうやって間近で見ると、彼の顔はものすごく綺麗だということに気付いた。

男の人に綺麗なんて言葉を使うのはどうかと思うのだけれど、そう思ったんだからしょうがない。

白磁の肌はそんじょそこのアイドルなんかよりもよっぽど透明感がある。

唇なんか、リップをつけていなさそうなのに潤っているように見えるってどうということよ。

ああ、世の中って不公平だわ。

天は二物も三物も与えてくれやがるものなのねと思っていると、教室がにわかに騒がしくなってきた。

もうすぐ授業が始まるため、ドアを開けて、受講者が続々と入ってくる。

そして、うしろのほうでなにかひそひそと密談をしている。

昼食を食べ終わった私は、荷物を自席に置いてお手洗いにいくこと

席を立つた。

それと同じタイミングで先ほど密談をしていた一群がフィリピンの座っている席に近づいてきた。

まあ、こんな山奥の大学にハリウッドスターみたいな外国人が紛れ込んでちゃ、誰だってお近づきになりたい、もしくは遠巻きで眺めたいなんて思っちゃうわよね。

そう思いながら、私はその一団を横目で見てお手洗いへと向かった。

私がお手洗いから戻ると、フィリピンの周りにはたくさんの人だけがりが出来ていた。

主に女子学生の。

私の荷物は適当なところへどかされ、そこには見知らぬ女子学生が座っていた。

あーあ、せっかく見やすい席を選んで座っていたのになあ。

周りを見渡すと、目ぼしい席にはもう人が座っており、あとは教室の端っこぐらいしか空いていなかった。

残念だわ、瀬崎先生のヨーロッパ文学の授業は私の楽しみの一つでもあったのに。

はあと小さなため息をつく、私は荷物を取りに人垣のほうへと近づいていった。

そそくさと荷物を取って離れようと手を伸ばすと、その手を誰かがっしりとつかまれた。

筋の浮いた男らしい手は滑らかな肌触りだったが、その手は力強く私の手を握っていた。

「杏奈さん、あなたの席はここだよ？」

私の手をしっかりと握っていたのはフィリップだった。

フィリップは周りの女子学生達に綺麗な笑顔でもってご退席を願った。

「ここは杏奈さんの席なんです。もうすぐ授業が始まりますから、どいてくれないか？」

そういわれては女子学生達も引き下がるしかあるまい。

えー、もっとお話したかったのに、などという彼らを気にせず、フィリップは席を立てて私を迎え入れた。

な、なんで席に座るだけなのにこの素敵外国人からエスコートされなきゃならんのか？

席に座るとき、「なにあの女」、「ブス」といった言葉が聞こえたが、聞かなかったことにして席に座った。

ちょうどそのとき、瀬崎先生がやってきたので、私は気持ちを切り替えて授業に向かうことにしたのである。

授業そのものはいつも通り面白かったのだが、隣にフィリップが座っているため、何だか落ち着かない気分だった。

その授業が終わり、学生達がぞろぞろと退出していくなか、フィリップは私に声をかけた。

「杏奈さん、申し訳ないのですが、ちょっと一緒に先生のところまでついて来てはくれませんか？」

「いいですよ」

次の授業までには間があるので、私は大人しくフィリップについていった。

フィリップは瀬崎先生とレポートのことについて話すと、私の背中に手をやりそつと前に押した。

「先生、僕はこの人に僕のチューターになってもらいたいのですが、どうでしょう？」

ええ？ チューター？

なんのことだろうと思わず先生とフィリップを見る。

「大良君か。うむ、彼女ならばそつなくこなしてくれるだろう。2週間のチューターにはいい人材を選んだじゃないかフィリップ」

「はい。僕もこんな人に巡り合えるとは思ってもいませんでしたよ」  
わけがわからず内心あたふたしている私をよそに、あれよあれよと  
話が進んでいってしまふ。

なし崩し的に、成績アップと引き換えに私は2週間フィリップのチ  
ューターをやることになってしまったのだ。

「ええと、チューターって勉強のサポートと生活上のサポートをす  
るものだって聞いたけれど、私はなにをすればいいのかしら？」  
本当になにをすればいいのだろう。

フィリップは、勉強はもちろんのこと、日本での日常生活になんら  
不便はないように見える。

それにわからないことがあったとしても、そこらの女子学生に聞け  
ばなんでも教えてくれるだろうに。

どうして私なんかをチューターに選んでしまったのだろう？

フィリップはにこつと微笑むと何事もなかったかのように歩き出し  
た。

ああ、あれか？ 最初の出会いが刷り込みみたいになっちゃったの  
かしら？

確かに最初の出会いのときに私は「わからないことがあったらいつ  
でも聞いて」といったし、あれは嘘ではない。

でも、いきなり見ず知らずの私をよくまあチューターにしたもんだ  
と知っている、フィリップはおもむろに私の手を取り、立ち止ま  
った。

「杏奈さん、僕のチューターになってもらったこと、感謝していま  
す。なぜ僕が杏奈さんをチューターに選んだか、いぶかしんでいる  
んじゃないませんか？」

まさにその通りだったので、私はこくりとうなずいた。

「こんなことをいうと変に思われるかもしれないのですが、僕  
は以前からある夢を見るんです。その夢の中の登場人物が杏奈さん  
にそっくりなんです」

そういうと、フィリップは少しだけ照れたような表情をした。

「自分でも信じられないかと思っっているのですが、その夢の中の女性  
は杏奈さんに本当にそっくりなんです。だから、最初に出会ったと  
きにとっても驚いてしまいました」

ああ、だから最初の出会いのときにちょっと拳動がおかしかったの  
ね。

「その夢はとても幸福で、起きるときはいつも涙を流しています。  
だからあなたに最初に会ったときに僕のチューターはこの人しかい  
ないと思っただんです」

あれ、なんだかこれって愛の告白みたいね。

はっと気付くと、私とフィリップの周りにはちらほらとギャラリイが集まり始めていた。

い、いかんいかん！　こんなところで見世物になる気は毛頭ありませんからね！！

「そうだったの、じゃあ私、次の授業があるからもう行くわね。これからの詳しい話は5時に図書館で待ち合わせして、そこで話し合いますよ」

そういうと私は逃げるようにその場をあとにした。

5時になり、授業を終えた私が図書館の前に行くと、そこにはちよつとした人だかりが出来ていた。

おお、またか。

図書館の前がサイン会場にでもなったかのように騒がしい。

飢えた女子学生達（？）に群がられているフィリップは笑みを絶やすことなく丁寧に対応している。

が、頭二つ分ぐらい高い彼が人垣の中から私の姿を認めるや否や、「ちよつと失礼」といって人垣を掻き分けてこちらへ向かってきた。

ひい！　うしろの女子学生達のじつとりとした視線が怖いです！

「杏奈さん、ここじゃなんですから、もっと静かなところへ行きましょう」

そういうとフィリップは私の手を取り研究棟のほうへすたすたと歩き始めた。

……この人、私よりもこの大学のことをよく知っているんじゃないだろうか。

フィリップは使われていない一室まで足を運ぶと、ポケットから鍵を取り出した。

何だか計画的な犯行（？）ですと、と思った私は、その小さな部屋に入ることに少しばかり警戒心を覚えた。

当たり前だが、男女がひとつの部屋に入るということは女性のほうが少しばかり貞操の危機を感じずにはいられない。

そう思っていると、部屋を空けたフィリップは次に窓を開けた。

秋の風がさあつと部屋に流れ込んでくる。

「はあ、いい風だ。ああ、この部屋にはあとで瀬崎先生もいらっしやるから、そんなに警戒しなくてもいいですよ」

うっ、読まれていた。

「そうだったんですか」

ほっとしながら部屋に入る。

「……なんてね」

え？

そういうとフィリップはにやりと意地悪な笑みを浮かべてすつとこちらへ近づいてきた。

内心あたふたしているとすぐ目の前には綺麗な顔が。

気付くと私はフィリップの腕の中にいた。

「ちょっと、なにするんですか?!」

正気に戻った私はかなり強めにフィリップの胸板を押すが、びくともしない。

それどころかさらに腕の中に閉じ込められ、頭に顎を乗せられる。

その腕のなかで、フィリップの柑橘系の香水の匂いをかいだ私は羞恥からちよつと頭に血が上ってきた。

「大声を出しますよ?」

小さいがしかし決然とした声でいうと、腕の力が少しだけ緩んだ。

だがしかし拘束が解けたわけではない。

「心配しなくても先生はすぐに来る。でも、君はチューターだから、僕の生活上のサポートもしくちやいけな。僕は今とっても動揺している。慣れない外国に来て、ものめずらしそうな顔をした日本人にたくさん囲まれて、心も身体も疲弊しきっている。慰めてくれ

てもいいと思うのだけれど」

「こういうことならほかの女子学生に頼んで下さい！ 私は今日会ったばかりの人にほいほい抱きつかせてあげるほどお好しじゃないんです！」

「でも、大声をあげない時点で十分お人好しだと思っただけ」

「先生がすぐに来るっていうんならちよつこのことは我慢します」

むすつとした顔でいうと、フィリップは困ったなあという顔をした。

「忍耐が日本人の美德？ それって僕を付け上がらせるだけだよ？」

困っているのはこっちです！ と思ったのもつかの間、突然フィリップが腕の拘束を解いた。

びっくりしていると、そのすぐあとに瀬崎先生が入室してきた。

「遅くなってすまない。どうした大良君、顔が赤いぞ？」

「いえ、なんでもありません」

身づくろいをして何事もなかったかのように装う。

「……先生はもっと遅くてもよかったですけどね」

「どうしたフィリップ、なにかあったか？」

「いえ、なにも。さあ先生、今後のことについて打ち合わせをしま

しょう」

フィリップに促された瀬崎先生は私にすまなそうにいった。

「大良君、この部屋で申し訳ないね。私の部屋は今ゼミ生が研究発表の準備で使用しているので使えないのだよ」

「そうだったんですか」

私に詫びると瀬崎先生は本題に入った。

「大良君にはこれから2週間、フィリップのチューターとして行動してもらうことになる。これがフィリップのカリキュラムだ。大良君のものとなるべく合わせてもらおうよう頼んであるので、見比べておいて欲しい。ああ、あとわからないことがあったら私はゼミ室にいるから、いつでも声をかけてきてくれ。照らし合わせと打ち合わせが終わったら、フィリップと二人でゼミ室に足を運んでくれるかな？」

「はい、わかりました」

そういうと、瀬崎先生は部屋から出て行った。

残されたのは私とフィリップの二人。

「さあ、とつとと作業を終わらせちゃいましょうー！」

私が張り切っていると、フィリップは少しだけげんなりした表情をした。

「僕と離れるのがそんなに嬉しい？」

「この部屋にずっといたら、またなにされるかわからないもの。やることはきつちりとやりますけど、それ以外では干渉しませんから」

私がそういうと、フィリップは少しだけ思索したあと、にいつとチエシヤ猫のような笑みを浮かべた。

「杏奈さんは真面目なんだね。だから僕のことも放っておけない。そうかあ、やることはきつちりとやってくれるんだね」

なにを思いついたのか不安ではあるが、一応さつき以外では手出しをしてこなかったので私は警戒しつつ作業を進めたのであった。

それからの1週間は私にとってある種拷問に等しかった。

というのも、私の行くところそのほとんどに無駄に綺麗な外国人が付いて回るようになったからだ。

「いやーだー!!! こんな目立ち方なんかしたくない!!!」

しかもその無駄に綺麗な外国人は他人に対しては紳士然とした態度を完璧に保っているため、評価はうなぎのぼりなのである。

皆さん、騙されていますよー、この人は紳士の仮面を被った獣なんですよー!

そうやって無駄に疲れた一週間が終わり、私はぐったりとした面持ちで自分のアパートへと帰っていった。

「くっ、でも、泣いても笑ってもあと一週間でこの拷問は終わるのよ、そうしたら私はまた目立たない一般市民に戻ることが出来るのよ! 負けないわ!」

ぐたつとしていると携帯にメールが入った。

メールの相手はフィリップポだった。

「まったく、メールで日本語も使いこなせるのだから、チューターなんて必要ないんじゃないかしら」

ぶつぶついいながら私はメールを受信した。

「駅前のバス停で待ってます。」

その簡素な一文を見て、私は「はああ」とため息をついた。

「呼び出されたこっちの身にもなって欲しいもんだわ。でもあと一週間、頑張って乗り切るのよ私！」

自分に渴をいれると、私は学バスへの道のりを歩き始めたのであった。

バス停に着くと、そこには今日まで散々気を遣わされた張本人が待っていた。

「で、チューターの私は、次はなにをすればいいんですか？」

半ばふて腐れながらそういうと、フィリップはおかしそうな顔をした。

「明日は土曜日でしょう？次の日がせつかくの休みなんだから、今日は飲みに行こうと思って」

「だからなぜその相手に私を誘う？ フィリップならば選り取り見取りなんじゃないの？」

「杏奈さん、もしかして焼いてる？」

急に機嫌がよくなったフィリップを見て、私はげんなりした。

「違います。たまには私以外の人とも付き合っただほうがいいんじゃないかしらと思って」

「杏奈さん以外の人となんか付き合いたくない」

そう言うとフィリップは表情をすつと改めた。

とたんに変わる周りの空気。

私はその空気に当てられ、ひゅっつと寒さを感じた。

「ここは人目が多いですね。誰にも邪魔されないとこへ行きましょ」

そういうと、フィリップはすたすたと歩いて駅のほうへと向かった。

「あっ、ちょっと待ってよ」

慌てて追いかける私を、振り向いたフィリップがチエシャ猫の笑顔で迎える。

「杏奈さん可愛い。僕のあとをついてくる雛鳥みたいだ」

「それでも日本人女性の平均身長よりは高いつもりなんですけど」

「そうやって真面目に返してくれる杏奈さんは本当に愛らしい」

……ちよ！

往来でなんつー台詞を吐いてんだこのやろっ！

他学部の学生さんたちが何事かと思うでしょうが！

しかも完璧な紳士の笑みでもって私を迎え入れるもんだから、周囲の人たちにあらぬ誤解を受け兼ねないじゃないの！

周囲の皆さん、これは誤解ですよー、私とこの人は何の関係もありませんよー。

そんな体を装おうとしたのもつかの間、フィリップが笑顔で手を差し出してきた。

「Let's go my honey」

誰がハニーだああ！

そのレベルの英語は今時の小学生でもわかるっつーの。

発音が超いいだけになんかむかつくわ！

そんなこんなで電車で揺られて20分ほど、私とフィリップはとある居酒屋の個室にいた。

まったく、何が悲しくてこの男と二人、飲みにいかなくちゃならんのよ。

確かに無駄に綺麗な顔をしていますけどねえ、酒の肴には十分なりますけどねえ、私にだって好みというものがですね……、どストライクですけれど。

でもいくら好みだからって内面獣みたいな男と差して飲むからにはこっちも腹据えてかかりますからね。

自慢じゃないけれど、お酒は強いほうなんです。

成人してからこのかた、酔って他人様に醜態を晒したことは一度もありません。

アパートに帰るまでが戦場よ！

そんな私の意気込みを知ってか知らずか、フィリップは美味しそうにお酒を飲んでいる。

手元のグラスが空くと、フィリップは手をあげて店員を呼んだ。

「すみません、十四代を拵で」

なんでそんな銘柄まで知っている？！

しかも拵とかうわばみかこいつ？

「そちらのお客様は？」

「……魔王、グラスで」

とはいいつつ、しっかり頼む私であった。

無駄に綺麗な顔した外国人が拵で日本酒飲んでる光景はとてもシュールだ。

しかも顔色ひとつ変えずに。

底知れぬものを感じつつも、私はフィリップに話を振った。

「あの、やっぱりフィリップにはチューターなんていらないうんじやないかしら。こんなに日本や大学のことをよく知っているし、私がいなくても、あとの1週間はちゃんと出来そうなものだと思うけれど」

私がそういうと、フィリップの周りの温度がすうっと下がった。

うわ、また火に油を注いでしまった。

フィリップは酒を飲む手を止めると、私に向かってぐいと身を突き出した。

「杏奈さんは僕といるのがそんなに嫌なんですか？」

無表情で、しかも周りの温度がどんどん下がるこの状況は心臓に悪い。

こんなとき、相手が丁寧語というのはちょっと怖い。

なにを考えているか読めないからだ。

「嫌というわけではないけれど、フィリップはなんでも出来ちゃうから私がいなくても大丈夫なんじゃないかと思って」

そういった途端、フィリップがさらに身を乗り出してきた。

そしてそのまま、ちゅっとキス、されてしまった。

ぼかんとする私を間近で見たフィリップは艶のある視線を送ってきた。

「僕はね、杏奈さんに出会ったときから杏奈さんの虜になっ  
ています。そんな相手のもとに、身の危険を感じているくせに、くそ  
真面目にひよこひよこついてくるそちらが悪いんですよ？」

瞬間、ぼつと顔から火を噴いたかのように赤くなる私。

固まった私を、これ幸いと思ったのか、フィリップは私の顎を掴み、  
私の下唇を啄ばむように食い始めた。

私はわけがわからなくなっ  
てぎゅっと目を瞑り、顔を背けようとし  
たが、フィリップが顎をしっかりと抑えているのでどこにもいけな  
かった。

啄ばみ、時々ぺろりと舐めるその仕草は、まるでお菓子を口にして  
いるかのようだ。

私の唇はそんなに美味しいのだろうかなどと思  
考が飛びそうになっ  
た時、唇を割って舌が侵入してきた。

思わず目を開けて身体をよじると、案外あっさり  
と開放された。

ほっと息をついたのもつかの間、フィリップが  
低い声で呟いた。

「欲情したこの身体をどうすればいい？」

見るとフィリップの目元は薄く朱に染まっている。

濡れた唇が柔らかかそうで色っぽい。

なのにそこから漏れ出る声は確実に男性のそれで、思いのほか腰に  
くる声だった。

「どうすれば……って、自分でなんとかして下さい！」

慌てて椅子を引こうとするが、なぜか動かない。

下を見ると、フィリップの長い両脚が椅子をがちりと押さええてい  
た。

「ち、ちょっと！ 子供みたいなことしないでください！」

「どこへも行かないと約束する？」

「します、しますから足をどけて下さい」

私がそういうと、フィリップはにいとあのチエシャ猫の笑みを浮  
かべた。

彼の長い脚から開放され、椅子が動くようになると、私は気持ち後  
ろへ下がった。

なんだかすっかりフィリップのペースにはまっている。

これじゃいけないわ！

私は体勢を整えると、フィリップに向かっていった。

「このお酒を飲んだら店を出しましょう。そして今日は真っ直ぐ家に帰るんです。来週もちゃんとチューターは続けますから、今日のところはこれで返して下さい」

私はそういつて頭を下げた。

もうなりふりなんか構ってられるもんか。

すると頭上からあたふたした空気が伝わってくる。

「杏奈さん、頭をあげてください、僕が悪かったです」

ゆっくり頭をあげると、そこには眉を下げたフィリップがいた。

「困りました、杏奈さんはまるで武士みたいなんです」

「お褒めに預かり光栄です」

フィリップは酒をくいとあけると、席を立った。

「わかりました、お会計は僕が払っておきますから、杏奈さんはもう少しだけゆっくりしてして下さい」

そういつと憎らしいぐらいに平然とした足取りでフィリップは会計を済ませにいった。

ひとり残された私は火照った頬を手ぬぐいで冷やした。

「ちくしょう、あのうわばみめ……」

身支度を済ませて外に出ると、秋の涼しい風が頬を撫でた。

フィリップが待っているところまでとっとと歩いてゆく。

背の高いフィリップを見上げ、さあいこうかと促す。

その仕草を見たフィリップは手を口元に当てて少しばかり顔を横に反らせた。

「杏奈さんは本当に可愛い。さつき自制できたのが奇跡みたいですよ?」

「もうその話はなしってさつきいったはずなんですけれど」

「しょうがないですよ、だって僕は男ですから」

そういつてふっと笑うフィリップも意外に可愛いと思っていた私はやはり少しばかり酔いが回っているのだろうか。

駅までの雑踏のなか、私とフィリップは付かず離れずの距離を保って歩いてきた。

と、前から学生の一団が歩いてきた。

何かのサークルの一団のようで、程よく酒が回っているようだ。

その顔には見覚えがあった。

最初の日にフィリップの席の隣に陣取ったあの女子学生達だった。

「あれー、フィリップ君じゃない？」

ひとりが気付くとその周りの女子学生がきゃっきゃと騒ぎ始めた。

「やだー、こんなところで会うなんて超運命感じちゃうんですけど  
！」

「ねえ、こちらこれから2次会に行くところなんだけど、フィリップ君も来ない？」

「ああそれ超いいよ！うちのサークルの男共、大していいのいな  
いからさあ、フィリップ君みたいなのがいてくれると本当、目の保  
養になるんだよねー」

そこまでいって、その女子学生達は、やっとというべきか、傍にい  
る私に気づいた。

「あ、この間の」

「えーと、もしかしてフィリップ君とは偶然会ったんですか？」

そうやって声をかけてくれる人はまだいい。

2、3人は私のことをはなつから完全無視でフィリップに近づいて  
いる。

フィリップの腕を取り、強引に引っ張っていこうとするものもいる。

「ねーえー、いこうよお」

「美希、飲みすぎだつてばあ」

いや、それは明らかに演技だろう。

酒飲みの私は、その態度が本当に酔っているのか、演技でやっているのかくらいわかる。

なんだか釈然としない感情が巻き起こったが、ここは素直に引いておくことにした。

「じゃあ、私はこれで」

そういうと私はフィリップに背を向けて夜の雑踏のなかへと歩き出したのである。

……、そうだ、これでよかったんだ。

私、望んでたじゃないの。

フィリップが私から離れてほかの人達と交流を持つのを。

あれ、でもなんでだろう、なぜだかわからないけれど、今私泣き出しそうになっている。

顔をキッとあげて、感傷に浸らないように夜の街を歩く。

「さっきの魔王が効いたかな」

そんなことをひとりごちると、私は駅に向かって歩いていった。

そのとき、うしろから声がかかった。

「杏奈さん、杏奈さん！」

はっとしてうしろを振り向くと、そこには息を切らしてかけてくるフィリップの姿があった。

「どうして行っちゃうんですか?!」

「だって、フィリップがほかの人と交流するのを邪魔しちゃいけないあとと思って」

「だから、さっきの約束はどうしたんですか？」

「約束？」

「僕から離れないでっていったことですよ」

「あ……、でもそれとこれとは」

「同じです、あなたがあそこで身を引かなくとも、僕は彼女達の誘いを断ってあなたを送りに来ていましたよ。あなたが行ってしまったから、僕は焦って彼女たちの前で醜態を晒す結果になってしまったじゃないですか。責任、取って下さいね」

「責任で……」

なんて理不尽な要求。

でもその理不尽な要求になぜだか安堵している私がいる。

「わかったわ。じゃあ、もう一回飲み直そう」

「じゃあ、僕のがままも聞いて下さい」

「一個だけなら」

「今度は僕の家で一緒に飲み直しましょう」

そういうと、フィリップは私の手をきゅっと握った。

「杏奈さんがどこへも行かないように、ですよ？」

私はその手を握り返すと、フィリップは驚いたような表情をした。

「杏奈さん？」

「どこへも行かないように、ね？」

そういつて照れたように笑う私を見たフィリップはすっと表情を改めた。

「な、なに？ 私なんか変なこといった？」

「杏奈さんは天然っていわれませんか？」

「不本意ながらいわれることもあるけれど……」

「今日はもう僕の家から一步も出しません」

「え、なにそれ?! それは終電がなくなっちゃうからちょっと……」

「泊まっていけばいいじゃないですか」

晴れやかに笑うフィリップ。

ああどうしよう、私はこの人の術中にどんどんと絡め取られている。

でも、最後の抵抗だけはしたい。

「いっておきますけれど、私、お酒は強いほうだから終電前までに多分フィリップが潰れると思うわ」

「ふうん、じゃ、賭けますか?」

「おうよ!」

「勇ましいですね……、その代わりに、杏奈さんが潰れたときはきっちり『介抱』させてもらいますからね」

「ハン、やってみなくちゃわからないわよ」

そんな他愛のないことを話しながら、私とフィリップは夜の闇に消えていったのだった。

それからの1週間は穏やかに過ぎていった。

フィリップと私はまるでずっと昔からの親友のように付き合っていた。

あの週末の夜の事はお互いに話さない。

話せば別れが辛くなることはわかっているから。

そうして、金曜日の5時、私のチューターの仕事は終わりを告げた。

「大良君、最後までよくやってくれたね。約束どおり成績に加点しておこう」

「ありがとうございます瀬崎先生。それじゃあ、私はこれで失礼します」

「フィリップとの別れはもう済んだのかい？」

「え？」

私が振り向くと、瀬崎先生はニコニコした表情でこちらを眺めていた。

「フィリップは君のことを最後までとつても楽しそうに話していたよ。てつきり別れは済んだものと思っていたのだが……」

「あの、フィリップは今どこに」

「4限が終わってすぐに学バスに乗って帰ったと思うよ。退校手続きなどはもう済んでいるから、今日中に荷造りを済ませて、明日の朝一番の電車に乗って帰るとかなんとか聞いていたな」

「そうですか、ありがとうございます」

私がそういって頭を下げると、瀬崎先生は見守るような笑顔でもって答えた。

「悔いの残らないようにね」

「……はい！」

私はそう返事をする、一目散に学バスに向かってかけていった。

電車に揺られながら、私は今までのことを反芻した。

「そういえば、最初の出会いはただの挙動のおかしい無駄に綺麗な外国人だとばかり思っていたけれど、この2週間で随分仲良くなったものよね……」

距離が縮まったのはやはりあの夜からか。

思い出すと顔が火照ってくる。

電車の中なので、極力平静を保とうとするが、一度頭に浮かんだものはそう簡単に離れてくれそうにない。

それにしても、最後の別れもなしに、勝手にひとりで帰ってしまっ  
なんて酷くないか。

そんなのは紳士の対応じゃないぞと文句をいってやるぞ。

そんなことを考えていると目的の駅に着いた。

フィリップが住んでいるマンションの前につく。

学生用の家具家電つきマンズリーマンションだから、荷造りといっ  
てもそんなに大したことをするわけでもないと踏んだ私は、とりあ  
えず電話をかけてみることにした。

プルルルル。

数回のコールで電話が繋がった。

「もしもし?」

「杏奈です。フィリップ、今電話大丈夫?」

「ええ、大丈夫ですよ」

「もう荷造りは終わったの?」

「支度自体は昨日でもう終わっています」

「そうなんだ。で、フィリップは私に何の挨拶もなしに帰ったのよ  
ね? 瀬崎先生のところに行ったら、フィリップはもう帰ったって

いつから、慌てて学校出てきちゃったわよ」

「杏奈さん、今どこにいるの？」

「知りたい？」

そういつと、電話の向こうで息を呑む音がしたと思ったら、フィリップの部屋のドアが派手に開けられた。

「来ちゃったよ」

そういいながら手を振る私を見て、フィリップは顔をゆがめた。

「そつち上がってもいい？」

「ええ」

フィリップの部屋の前へ上がった私は、ドアの前に立ち尽くしているフィリップにいぶかしげな顔をした。

「入れてくれないの？」

そういつた瞬間、フィリップが私を抱きしめてきた。

今度は私も抱き返した。

ぎゅっと強くなる腕の力を心地よいなあと感じる私は、もう十分この人のことが好きになっていいのかもしれない。

部屋に入ると、以前見慣れたはずの風景がなんだかよそよしく見えた。

この部屋も、部屋の主がいなくなることをわかっているのだろうか。

「杏奈さん」

呼ばれて振り向くと、フィリップが熱を持った青空のような瞳をこちらに向けてきた。

「なんで来たんですか」

「なんでって、お別れをいいに」

「こつこつ感傷に浸っている男の部屋に女ひとりで来るということがどういふことかわかっていますね？」

「そうだ、フィリップ、世話になった私に挨拶もなしにひとりで国へ帰っちゃうなんて紳士じゃないぞっといおうと思っ……」

皆までいわせずにフィリップの貪るようなキスが落ちた。

声すらも飲み込んでしまいそうな激しいキスに私は翻弄され、私はいつの間にか腰から下が動かなくなっていた。

腰が抜けた私を優しく床に横たえようと、フィリップは私に跨り本格的に愛撫をしにかかった。

唇で、髪に、頬に、おでこに、まぶたに、顔中のあらゆるところに触れていく。

そうしながらも、片手は私の服の裾を器用に弄っている。

「ちょ、ちょっとまって!」

無言で私の耳朶を舐めるフィリップだったが、私の焦った声を聞くと、けだるそうにそこから顔をあげた。

「どうしたの？ ああ、『待った』は今でもうないから。次は止まらないよ?」

「あのね、この間はその、いろいろしてもらってばかりだったから、こんどはその、私がいるいろするね?」

そういつて潤んだ目でフィリップの顔を見上げると、さっきまで剣呑としていた表情のフィリップの顔が一気に赤くなった。

はああ、と長いため息をつく、フィリップは脱力し、私の体の上に自分の体を預けた。

「杏奈さん、やっぱり天然でしょう?」

「え?」

「……わかりました。今日は杏奈さんにいろいろしてもらったことにします。でもそのあとは僕もいろいろ返しますから、覚悟しておいて下さいね?」

そういうとフィリップは私を抱き上げて自分の腕の中にすっぽりと収めた。

「はあ、国へ連れて帰りたいたい……」

「私もフィリップの国へ行ってみたいな」

「本当にそう思つたら、僕は待ちますよ、いつまでも」

そういつて、フィリップは私を抱く腕に力をこめた。

「ああ、でも言葉の壁は厚いのかしら。英語は通じるんだよね？」

「愛があれば、言葉の壁くらいどうってことないですよ」

「そうよね、って、愛？」

「子供は3人欲しいですね」

「子供?!」

「女の子は杏奈さんに似てきつと可愛くなるんだろうなあ」

「あの、フィリップ？」

「杏奈さん!」

「はい?!」

「漢<sup>オ</sup>に<sup>ト</sup>「言は<sup>ク</sup>ありませんよね?」

「は、はい!」

私がそう返事をする、フィリップはチェシャ猫のような笑みを見せた。

「じゃあ決定です。杏奈さん、留学しましょう！」

「えええ?!」

「僕の父に頼んでおきます。パスポートの準備だけしておいて下さいね」

私はフィリップの腕のなかで目を白黒させた。

「ああ、あの夢は正夢だったんですね」

「フィリップが見たっていうあの夢? どんな内容だったの?」

「それは、ヒ・ミ・ツです」

そういつてしゅいと指を唇に持つてくる仕草に、不覚にも萌えてしまった私であった。

今日は私が留学に旅立つ日である。

一ヶ月の短期言語留学だが、費用はほとんどフィリップのお父上持ちだ。

「いいのかしら、こんなに至れり尽くせりで」

そう思いつつも初の海外渡航、期待に胸を膨らませる私である。

「杏奈さん！」

呼ばれて振り向くと、そこにはフィリップの姿が。

「フィリップ、なんでここに？」

「杏奈さんを迎えに来ました。あ、席はもちろんファーストクラスですよ？」

そういつて私を優雅にエスコートするフィリップは空港でひときわ目立っている。

さて、この海外渡航、どうなることやら。

「ねえフィリップ」

「はい？」

「私を、ちゃんと捕まえてね？」

そういうと、フィリップは綺麗な笑みでもって応えとした。

「ええ。これからはずっと、あなたの手をしっかりと握っていますよ」

フィリップの青空のような瞳を見上げる。

今日は快晴だ。

ああ、だから空もあんなに澄んでいるのか。

こうして私は大切な人と共に、一ヶ月の海外渡航へ出たのであった。

<了>

銀の章 「ANNA」 1

季節は夏。

ゆらゆらと、よどんだ空気がビル街を覆う。

うだる暑さの中、私はいつも通り仕事を終えると、急いで帰宅した。

明日から1週間、夏期休暇をとっているのだ。

これが早く帰らずにいられようか。

電車を乗り継ぎ、最寄り駅で降りると、駅から歩いて5分のスーパーへと向かう。

そこで数人分の食糧を買い込むと、私は足早に帰路へと着いた。

先日、私は道端で男をひとり拾ったのである。

最初は道端に白いゴミ袋が2つ分ほど置いてあるのかと思った。

不法投棄なんて、この近辺では今時珍しいわねと思いつながら近づいてみると、それが人間の男であることがわかった。

「やあね、こんなところに酔っ払いなんて」

関わらないようにと足早で歩く。

男の前まで来たとき、不意に男が身動きをした。

「う……」

小さなうめき声をあげながら、男はその場から立ち上がろうとした。

「ひっ」

悲鳴を飲み込んだ私は、その男から距離をとり、小走りで逃げた。

しばらく走ったあと、恐る恐るうしろを振り返る。

遠くのほうで、男は動かずにうずくまっていた。

それから動く気配はない。

……。

待って、私。

もしかしたらあの人病気なんじゃないかしら？

お酒の匂いはしなかったから、酔っ払いではないことはわかった。

もしも脱水症状とか熱中症とかで倒れているのだとしたら、見捨ててはあげないわ。

私は元来た道を引き返すと、男の前で立ち止まった。

バッグから携帯電話を取り出し、警察か消防にいつでも連絡出来る体勢にしておく。

私はその男に声をかけた。

「あの、大丈夫ですか？」

男の服装は白い七分袖のワッフルTシャツに、ヴィンテージ加工のブーツカットデニム、ドッグタグを首からぶら下げている。

靴はレッドウィングの革靴。

バイク乗りなのだろうか。

髪の色は綺麗なアッシュ。

バンドかなにかをやってもいるのだろうか。

男はうずくまりながら、「……水」と一言呟いた。

私はバッグから飲みかけのペットボトルを取り出して、男に与えた。

男はそれをやや性急に受け取ると、喉を震わせて顎から水が垂れるのも構わずごくごくと飲み干した。

男が一息ついたところで、私は男にまた声をかけた。

「どこか具合が悪いところはありませんか？ 苦しいのであれば救急車を呼びますよ？」

男は顔をあげた。

男の瞳は、街灯に照らされてきらきらと反射した。

ブルートパーズ。

宝石のようなその輝きに私は息を飲んだ。

どれぐらいの時間がたったのだろう、瞬きすらも忘れて見入っていた私は、はっと気付くとそのぶしつけな視線を詫びるように顔を背けた。

「あの、近くに交番がありますから、そこまで一緒に付き添いますよ」

私がそういうと、男はしばらく思案したあと、こういった。

「交番ではなく、あなたの家にお邪魔させてはもらえないだろうか」  
そのテノールの声は思いのほかよく通り、耳に心地よかった。

「無作法なのは承知の上でお願いします。少しの時間でいいんです」  
困ったようにそう丁寧にいわれては、見捨てるわけにもいかず、私はこの男を自分のマンションまで連れて帰ってくることにしたのだ。

こんな夜中に、道端で倒れていた見ず知らずの人を家に連れ込むなんてどうかしていると思ったのだが、弱っているものを見捨ててはおけない性分の私はその男を家にあげるのを許してしまったのである。

1Kのマンションは人間が2人入るととたんに狭く見えた。

部屋の中は雑然としていたが、いまさら取り繕うわけでもなく、私は荷物をどかすと彼に部屋の床に座るように促した。

やかに火をかけると、大人しく座った彼の近くに私も座り、事情を聞く。

「どうして警察には行きたくないんですか？　もしなにか手伝えることがあつたらいつてください」

私がそういうと、彼は少しばかり顔をしかめたあと、ここまでのいきさつを話し始めた。

「俺には、今なにが起こっているのかさっぱり掴めていないんです。気がついたらあそこにいたんです。体力がなくなっていて、ほとんど動けなくなっていた。こんなことをいうと変に思われるかもしれませんが、今俺は自分が何者かもわからなくなっているんです。こんな奇妙なことが自分の身に降りかかるなんて思ってもいませんでした」

そう話す彼は嘘をついているわけではなさそうだった。

こういう手口の物取りつてあるのかしら、もしも強姦魔や殺人犯だったら私一巻の終わりよね、などと考えをめぐらせたのだが、目の前にいる人物はそういうことをするような人には見えなかった。

「しょうがない、信じて家にあげた私も悪いんだから、もしお金を

取られたり、貞操や命の危機が訪れたりしても、精一杯抵抗はするけれど自業自得ってことよね」

そうひとり納得すると、私は彼に話しかけた。

「それは難儀でしたね。そういうことならば、今日は私の家に泊まってください。でも、明日になったらやはり警察に行きましょう。搜索願が出されているかもしれませんから」

そう話しかけたところでやかんのお湯がしゅんしゅんと湯気を出した。

やかんからポットにお湯を入れ、そこから2人分の紅茶を淹れる。

私はマグカップを彼に渡した。

「はい、熱いので気をつけてくださいね」

彼はマグカップを受け取ると深くお辞儀をした。

「ありがとうございます。このご恩は一生忘れません」

私はその仕草に驚いて片手を左右にぶんぶんと振った。

「あの、頭をあげてください。そんなに畏まらないでください、私は私ができることをただやっただけなのですから」

あたふたする私をよそに、頭をゆっくりとあげた彼は熱の籠った視線で私を見つめた。

「あの場所で倒れている間、人が通らないわけではなかった。でも誰も彼も俺のことを見なかったふりをして通り過ぎていった。そんな中、俺に声をかけて、あまつさえ介抱してくれたのはあなたが最初で最後だった」

そういうと、彼は私を凝視した。

自然と私も彼を見つめることとなるが、そのときに彼の顔の造作が整っていることに気がついた。

すっと通った鼻梁、賢そうな眉、触れたら柔らかそうな唇、そして強い意思を感じさせるブルートップパースの瞳。

どきりと心臓が波打った。

「あの、もしお嫌でなかったら、うちのシャワー使いませんか？

私、コンビニで着るものとか買出しに行ってきますから、その間にシャワー浴びておいてください」

私がそういうと今度は相手が恐縮したようになった。

「すみません、そこまで気を遣わせてしまって……。お気遣いなく、といたいたいところですが、今まで地面で横たわっていた体は汚いですからね。雑費はあとで必ずお支払いしますよ」

「じゃあ、タオルはここにおいておきますね。着るもののサイズはMでいいですか？」

「ええ、すみません」

そうして私は歩いて5分のコンビニに買い物に出かけた。

生まれてこのかた、身内以外で男物の服を買ったことがない私は、少しだけどきどきしながら買い物籠に下着を放り込んだ。

手軽につまめるものと、飲み物なども一緒に買う。

レジで会計をしながら、私はなんだか変なことになってしまったなあ、と少しばかり顔を赤くしたのである。

コンビニから帰ってくると、男はシャワーを浴びてさっぱりしたようだった。

バスタオルを腰に巻いただけのあられもない格好で片膝を立ててテレビを見ている。

……うわ、「鍛え上げられた上半身」というものを久しぶりに間近で見た。

滑らかな肌なのに、引き締まるところは引き締まっているって、ガタイのいい人が好みの私には垂涎ものだ。

一体なんのお仕事をしたらこうなるのかしら。

「はい、どつぞ」

買って来た服と部屋着として使っている緩めの黒いジャージを手渡すと、私は部屋のドアを閉め、キッチンの前に立った。

夕飯はまだだったので、2人分の簡単な食事を作る。

熱いので冷やし中華を作ることにした。

出来上がったものをもって部屋にはいると、そこには私のジャージを見事に着こなした彼がいた。

割り箸を彼に渡し、2人でテレビを見ながら冷やし中華を食べる。

「いただきます」

一口食べた彼が目を見開いた。

「美味しい」

そういうと、あとはひたすら無言でその冷やし中華を食べ続けた。

あっという間に食べ終わると、彼は私がコップに注いだ水を一息に飲んだ。

「とても美味しかったです。今まで、こんな美味しい冷やし中華を食べたことがない」

「そんな、これ近くのスーパーで買ってきたものですよ。よっぽどお腹が空いていたんですね」

そういうと私は自分の残りをゆっくりと食べ始めた。

彼はその間テレビを見ている。

なんなんだろう、この空間は。

私の部屋が私の部屋じゃないみたいだわ。

程なくして冷やし中華を食べ終わると、私は皿を持ってキッチンへと立った。

洗いものをしながら、これからのことを考える。

ああそうだ、まずは私もシャワー浴びなきゃなんだわ。

ドアを隔てた向こうに見ず知らずの他人がいるってなんだか変な感じ。

私も我ながら無謀というか、大胆というか、危機感がないともいうわね。

皿を水切りして、手を拭いて部屋に戻る。

そそくさと洋服ダンスから下着と着替えを取り出すと、私は彼に向かって声をかけた。

「じゃあ、私シャワー浴びてきますから、テレビでも見てくつろいでいてください。あなたの服は今日洗ってエアコンの下に干しておきますね」

そついうと私は風呂場へと向かった。

「風呂・トイレ別の物件を借りておいてよかったとこんなところで思う日が来るとは……」

そうひとりごちると私は蛇口を捻った。

シャワーを浴びてすっきりした私は髪を拭きながら部屋へと戻った。

そこにはベッドに寄りかかり、すうすうと寝息を立てている彼の姿があった。

「そういえばさつき体力がなくなっていたっていつていたものね。こんな境遇になって一番びっくりしているのはこの人なのよね」

彼を起こさないように、静かに押入れを開け、客用の布団を取る。

「さて、どこに敷こうかしら。申し訳ないけれど、一回起きてもらう必要があるわよね」

布団をとりあえずベッドの上に置くと、私は彼を起こそうと肩に手をかけた。

その瞬間、私はものすごい勢いで引き倒された。

ぐるんと世界が回る。

目の前には天井と熱を持ったブルートパースの瞳。

床からの衝撃が来なかったのは、私の後頭部に大きな手が添えられているのだということを知覚した。

「あ、の」

私がそれだけいうと、彼ははっとした表情で正気に戻った。

「……すまない」

彼はそういうと、慌てたように私を解放した。

体勢を立て直した私は、コンビニで買ってきた歯ブラシを彼に渡した。

「布団敷きますからね、歯を磨いてきてください」

私はキッチンへ彼を追いやった。

「な、なんだったのかしら今のは」

心臓がバクバクいう音を聞きながら、私は支度を整えた。

彼と入れ違いに私も身支度を整えると、洗濯機が終了する間、ベッドに座ってテレビを見ることにした。

とはいっても、テレビの内容なんて全然頭の中に入っていない。

目の前にいる綺麗な灰色をした髪の毛の、ブルートパーズの瞳を持った得体の知れない人物のほうにどうしたって意識がいつてしまうのである。

埒が明かないので、私は彼に声をかけてみることにした。

「あの、そういえばまだ名前を聞いていなかったわ。もし覚えてい

たら教えてもらえるかしら？」

彼が振り向いて、体勢をずらした。

彼は申し訳なさそうな表情をした。

「実は名前も思い出せないんだ。今まで思い出せやしないかと努力していたのだけれど。でも、これがもしかしたら俺の名前なのかもしれない」

そういつと彼は懐からドツグタグを取り出した。

そこには表に「Melilitus」、裏には「Gilbert・Fergus・Chain」と彫られていた。

「メリトウス？ ギルバート・ファーガス・チェーン……？」

そんなブランド名は聞いたこともなかったので、これがこの人の名前なのではないかと思うことにした。

「便宜上とはいえ、これからはあなたのことをギルバート、ギルと呼ぶことにするわ」

「では、あなたの名前も教えて欲しい」

「私の名前は大良杏奈よ」

「杏奈、か。杏奈……」

そういつと、ギルはなにかを考えるような仕草をした。

「なにか引つかかる?」

「いや、いい名前だと思って」

「そう、そういつてもらえると嬉しいわ」

そんなことを話し、洗濯物を干しながら、この日は就寝したのだ  
た。

次の日、会社に行かなければならない私は、ギルバートに1万円を渡すと、こう話した。

「ごめんなさい、昨日一緒に警察に行こうっていったのは私のほうだったのに。でも、今日会社に行けば明日明後日は休みだからなにか力になれると思うわ。このお金で、好きなところにいって、記憶を取り戻してきてください」

そういうと私は慌しく支度を始めた。

「帰りは8時過ぎになると思うから。これが私の電話番号ね、なにかあったら連絡して」

そういつて一緒に部屋を出た。

「ごめんね、ジーンズまだ半乾きで気持ち悪いでしょうに」

「いや、それほどでもない」

そんな会話をしながら一緒に駅へと向かう。

ギルバートは電車の乗りかたは覚えているようで、お金を崩して渋谷までの切符を買った。

朝のホームで、手ぶらの長身男性とOLが並んで立っている様はちよっと異様だ。

しかもその男性の容姿は銀髪碧眼のため、目立つことこの上ない。

大人の皆様は一瞬驚いた表情をしたあと、またすぐに視線を反らし  
てくれるのだが、中高生はそうはいかない。

「ねえ見て見て、あそこ超格好いい人がいるよ！」

「わ、本当だ！」

「なんかバンドやってる人っぽいね」

「でも楽器持ってないよ」

「多分ヴォーカルの人なんだよ」

「でもあんまりナルシストには見えないね」

遠慮のないその声はこちらまで十分伝わってきたが、ギルバートは  
我関せずといった体で佇んでいる。

なんだかいたたまれない気分になっているところで、おりよく電車が  
がやってきた。

ギルバートと一緒に電車に乗り込む。

すぐに端のほうへと押された。

ああ朝のこのラッシュはきついよね、と思っていたら、一瞬周囲  
が暗くなったと思ったら、自分の周りにだけ僅かなスペースが開い  
たことに気付いた。

ふと上を見ると、そこには電車のドアに両手をつけて、人の波から私を庇ってくれるギルバートの姿がそこにあったのだ。

「あ、ありがとう」

「いや、大したことじゃない」

そういつてギルバートは何事もなかったかのようにその場に佇んだ。

あのですね、そのあなたにとっては大したことじゃないことにもものすごく感動している人間がここにいるんです。

こういうことをさらっとできるあなたは一体何者なんですか？

胸の前で鞆を抱えながら、私は女の子扱いしてくれたギルバートに対する感動に浸っていたのだった。

「ギルは渋谷ってどんな場所だか覚えてる？」

電車に乗り込み、都心へと向かっている私はギルバートにそれとなく聞いてみた。

「いや、だが、渋谷になにかある気がして、そこへ向かおうと思っただ」

そう話した瞬間、電車が大きく揺れた。

「きゃー」

前につんのめった私を、ギルバートが片手でしっかりと抱きかかえてくれた。

もう片方の手はてすりに捕まっている。

すぐに電車の揺れは収まり、乗客達も元に戻った。

だが、私はまだギルバートの腕の中にいる。

「ありがとう、もう大丈夫だから……？」

ギルバートの腕が一向に緩まないことをいぶかしんだ私は顔を上にあげた。

すると、間近でギルバートのブルートパーズの目とかち合った。

「ギル？」

そう小声で呟くと、ギルバートははっと我に返ったようだった。

我に返って、そしてギルバートは目元を赤くした。

「すまない……、まただ。どうしてかわからないが、杏奈、君を腕の中に閉じ込めておいてしまいたくなる」

「え……？」

小声だったが、周囲の人にもしつかりと聞こえていたようで、どこからかごっほんとかいひが聞こえる。

ひい！ 恥ずかしいのはこちらも同じです！

朝っぱらから、このくそ狭い中でなにやってるんだというお叱りの咳を聞いた私達は、とりあえず離れることにした。

でも、私は心臓がバクバクいつている。

羞恥と、それからこれは、ときめき？

目的の駅で電車を降りた私は会社へと出勤した。

いつものように仕事をこなし、いつものように休憩し、そしていつものように帰路に着く。

その間、私の頭の片隅にはギルバートのことが絶えず離れなかった。

最寄りの駅に着くと、そこには私を待つギルバートの姿があった。

手には数個の紙袋を持っている。

どれも、渋谷で展開しているメンズブランドのものだった。

「それ、どうしたの？」

私はいぶかしんだ。

ギルバートには1万円しか渡していなかったはずなのだけれど。

「これを着て広告塔になってくれればお金はいらないといわれたので」

そういつとギルバートは紙袋を持ち上げた。

「へえ、ギルつてすごいよね……、私なんか逆立ちしてもそんな目にはあわないわよ」

そのあと、ギルバートと連れ立って食材を買いにスーパーに出かけた。

スーパーで買ったものは全部ギルバートが持ってくれた。

ありがたい荷物持ちが出来たわとひとり喜ぶ私であった。

部屋に帰ってきて、私が料理の支度をしている間、ギルバートがシャワーを浴びる。

出来上がったところにちょうどギルバートが出てきた。

少し伸びかけていた髭も剃ってさっぱりした顔をしている。

この人、まさか今後も私の家に住み着く気じゃないでしょうねと危ぶんだのだが、まあ、一週間くらいだったらなんとか我慢しようと思っただけだった。

この日の夕食は出来合いのハンバーグに火を通したものと、ゴーヤーチャンプルー、冷奴である。

ギルバートは中でもゴーヤーチャンプルーを一口食べると、「美味

しい」といって、無言で完食した。

「杏奈、君が作る料理は本当に美味しい」

そういわれると、作り手としてもうれしい限りではあるのだが、こんななし崩しに生活していてもいいのかと不安にはなる。

シャワーを浴びて出てくると、ギルバートが布団の上ですやすやと寝ていた。

「今日どこへ行ってなにを見たのか聞こうと思ったのにな」

寝顔が案外幼いことに気付いて、ひとり微笑む。

「本当に、この人はなんなんだろう」

突然現れ、私の生活の中に嵐のように入り込んできた人。

たった2日目にして、すっかり私の家の生活ペースに馴染んでいる人。

……ヒモ？

いや、自分の周りの最低限のこと以外ではあんまり手を患わされていないから、ヒモとはちょっと違うのかしら？

なんにせよ、この人の記憶が戻ってくれることを願うばかりだわ。

そう思い、電気を消してベッドに横になる。

「明日はギルの記憶探しの旅に出かけなくちゃ」

そう思いながら、私は心地よい眠りの中へといざなわれていったのである。

「う……ん」

伸びをしたその手を取られて、手の甲に柔らかい感触が当たる。

寝返りを打とうとすると、両側に壁がある。

片方は冷たい壁、もう片方は温かい壁である。

エアコンの風が少し寒かったので、私は目を閉じたまま温かい壁のほうへと擦り寄る。

その温かい壁は、擦り寄った私を力強い腕で抱きしめた。

その拘束感が気持ちよかったので、私は温かい壁に頭を擦り付けた。するとその温かい壁は私の頭の上に柔らかい感触を落としたり。

くすぐったくて思わず寝ながら微笑むと、壁はすつとなくなり、なにかに跨られる感覚があった。

あれ、温かい壁はどこ？ と眉をしかめると、おでこに柔らかい感触が落ちた。

なんだろう、と思って目を開けると、目の前にはブルートパーズの

瞳が。

10cmほどの距離で、私はその「温かい壁」と対面したのである。

「……どういふことか説明してもらいましょうか」

今私はベッドの上に正座して座っている。

ベッドの下にはギルバートがしゅんとした表情で気持ちづなだれて座っている。

もちろん正座である。

「いや、早朝トイレに行った帰りに杏奈の気持ちよさそうな寝顔を見たら、ついふらふらと……」

「それで、さっきは私が起きないのをお願いことになにやらいろいろしてくれたようですね」

「あ、あれは杏奈が可愛かったからつい……」

「ついでなんでも、今後はそういう接触は禁止です！　じゃないとこの家から追い出しますからね！」

まったく……、こういうことは最初が肝心だから、びしっといっておかないと都合のいい女にされかねないわと思った私は心を鬼にしてそう宣言した。

いや、今だって十分都合のいい女にされているとは思っただけど…

…。

朝っぱらからいらぬ気力を使った私は、ちょっとばかりげっそりして身支度を整えた。

今日の私のコーディネートはジーンズのジャケットにマキシ丈のワンピース、グラディエーターサンダルといういでたちだ。

髪の毛はコテでゆるく巻いてみた。

対するギルバートは黒のツイルサファリ半袖シャツの下に白いＴシャツ、白いチノパンに白のトンがり靴だ。

それにサングラスをするもんだから、ホストか！ と突っ込みたくなったのはきつと私だけではあるまい。

なんだか、「OLとホストの休日」というまんまのいでたちに若干恥ずかしさを覚えないでもない私であった。

籠バッグに財布やらポーチやら手帳やらを入れ、準備万端整えると私とギルバートは記憶探しの旅へと出かけたのである。

電車を乗り継ぎ、まずは渋谷へと向かう。

「昨日はどうだった？ なにか思い出せた？」

私がそう聞くと、ギルバートはうーんと首を捻った。

「めばしいところは行ってみたけれど、あまり思い出せなかった」

そんな話をしながらも私の足はなぜか渋谷のスイパラに向かう。

店の前の階段で入店待ちをしながら、私は弁解した。

「あ、ちょこつと甘いものが食べたかったっていうか、別に食い意地張ってるわけじゃないのよ!」

自分たちの順番が来て店内に入ると、そこはまさにスイーツのпараダイスだった。

店の客層が若い、とは思ったが、腹が減っては戦が出来ぬとばかり、私は列に並んでめばしいスイーツを片っ端から取っていった。

ギルバートは Pasta などの軽食を取ってきている。

「さあ食べよう!」

わくわくしながらケーキにフォークを突き刺す。

「費用は私が出すから、好きなだけ食べてね」

そっぴいなながら私はケーキを口に放り込んだ。

「味はまあまあだけど、このお得感とわくわく感がいいのよね」

Pasta を一口食べたギルバートはフォークをおくところだった。

「杏奈が作った料理のほうが美味しい」

持ってきたものを全部食べたギルバートは、あとはスープやジュース、サラダなどを持ってくるばかりだった。

「もしかして、お腹空いてなかった？」

私がそう聞くと、ギルバートは首を振った。

「俺は杏奈の手料理のほうが好きだから」

「うん、そっか」

それからは無言で食事をする私だったが、心の中はなんだかほくほくと温かかった。

「ねえあれ、芸能人じゃない？」

「うそ、誰？」

「わかんない、でもオーラがある」

スイパラを出てから道を歩くとそんな声がかかる。

目立ちたくないと思う反面、私の連れはサングラスを取ったらもつと格好いいんだぞという変な優越感がある。

ああ、なんだか私ったら思いっきりミーハーな人間ね。

でもなあ、ギルバートの隣に歩いているのが佐々木希とかジェシカ・アルバとかならわかるけれど、この私じゃあなあ……。

私が隣ではあとため息をつく、ギルバートが声をかけてきた。

「すまない杏奈、俺の用事なのにつき合わせてしまって。本当ならば杏奈は俺とはなんの関わりもなかったはずなのに。こんなによくしてもらっているのに、俺は杏奈になにも返していない」

サングラスの向こうで、すまなそうなギルバートの瞳とぶつかった。

「いいのよ、そんなこと心配しなくて。これは私がやりたくてやっているんですから。でもそうねえ、早いところ新たな生活基盤を見つけてもらわないと、私としてもちょっと困るかな」

そういわないと、この関係がずるずると続きそうだったので、私は努めて冷静に返事をした。

だって、はつきりいってギルバートと一緒にいるのは楽しい。

さりげないエスコートがあるし、見た目だっていい。

私を気遣ってくれるし、私が嫌なことはしない。

お金の面はさておいて、こんなに自分の思い通りになる存在がいるなんて思わなかった。

それはもしかしたら、私が助けたからということとで恩義を感じてそう振舞ってくれているだけかもしれないけれど。

打算的な自分が見え隠れする。

「こんないい物件はほかにないんだから、このまま縛っちゃいなよ」  
それに対抗するように、別の自分が浮かぶ。

「あんだ、相手の弱みに付け込むって、それはどういう了見よ。あんだのポリシー、『弱っているものを放っておけない』は、どこへいったの？」

私の中で対立する2人の私の対話を一旦終了させると、私はギルバートに向き直った。

「早く記憶が戻るといいね。戻らなかつたら、警察に行くなり、病院に行くなり、これを機に新しい生活を始めるなり、いろんな選択肢があるじゃない。そう焦ることはないわよ。でも、私の部屋に滞在する期限を決めましょう。1週間経っても何の進展もなかつたら、しかるべきところに出向くこと、これでいい？」

私がそういうと、ギルバートはこくりと頷いた。

「ああ、そうすることにする。杏奈にはいろいろ世話をかけるな」  
そういってギルバートは困ったように笑ったのだった。

その1週間の期限はあっという間に過ぎていった。

あれからギルバートは都心のいろいろなところに足を運んでみたが、めぼしい成果はあがらず、意気消沈して返ってくる日が3日ほど続いた。

それから、自分の身の振り方を考えるべく、就職をしようとフリーペーパーを持ってきてはみたが、これもめぼしい職を見つけないことは出来なかった。

「身分証のいらぬ、稼ぎのいい職なんて早々見つかるものじゃないわよね。これはやはり、記憶を取り戻してもらうしかなさそうね」  
残り3日となった今日はまた、私が出勤する最終の日である。

来週は長期の休みを取っているため、一週間丸々お休みなのである。私は会社帰りに数人分の食糧を買い込むと、私は少しだけ軽い足取りで家路に着いたのであった。

身支度を整え、部屋着でベッドの上に寝転ぶ私はギルバートに提案した。

「もし記憶が見つからなかったら、次の丸々一週間休みだから付き合っただけでもいいわよ」

私がそういつとギルバートは申し訳なさそうな表情をした。

「すまない、杏奈には本当になにからなにまで世話になりっぱなしだ。どうすればこの恩を返せる？」

ギルバートがそういつたとき、私はふと思いついたことをいつてみた。

「私を満足させてくれたらそれでいいかな……なんてね？」

あははーと笑った私の前に、黒い影が出来る。

顔をあげると、そこには真摯な表情をしたギルバートがいた。

「今の俺にあげられるものは体しかないけれど、それで杏奈を満足させることが出来るのならば喜んで使おう」

「え……ちょっと、今は冗談だつてば」

あたふたしている私をよそに、ギルバートの両手が迫る。

「ぎゃ………！」

思わず目を瞑ってしまった私であるが、予想したような衝撃はどこからも来なかった。

代わりに、穏やかな温かさが体を包んだ。

私はまた、ギルバートの腕の中にいた。

「あ……ギル？」

目の前の黒いジャージをぎゅっと掴む。

「杏奈、好きだ」

突然の告白だった。

「え？」

「俺の人生の中で今までこんなによくしてくれた人がいたかどうかはわからない。でも、俺が何者でも、こうやって無条件に受け入れてくれた女性は杏奈しかない。それだけは断言できる。俺はこの手を、離したくない」

そういつて、ギルバートは私を抱く腕に力を込めた。

「杏奈……」

そういつと、ギルバートは私の頬にキスを落とす。

ギルバートの吐息がくすぐったくて、思わず身をよじろうとするがそれは叶わない。

そのやさしく甘い拘束の中、何度も何度も口付けを受け、次第に私の感情も蕩けてきた。

「はあ、あ……」

次第にお互いの吐息が艶かしいものとなってくる。

いつの間にか私はベッドの上で組み敷かれ、ギルバートから本格的な愛撫を受けていた。

「この1週間、杏奈の隣で過ごす日々は甘美でそして苦痛だった」

私の部屋着の上から優しく口付けを落とすギルバートは淡々と告白を始めた。

「杏奈の柔らかな寝息が聞こえるたび、いても立ってもいられなくなって、起き上がったことが何度もあった。杏奈の寝顔を窺うと、幸福になると同時に、どうしようもない飢餓感が襲ってくるんだ。何度も手を出そうとして、何度堪えたかわからない」

そっぴいながら手と口で私の体を様々に翻弄する。

安物のパイプベッドがキシキシと鳴る。

その音ですでに羞恥心を煽られていた私は、ギルバートからの告白でさらに顔を赤くした。

「そんなこといわれても……」

だが、その告白が嬉しかったのは事実だ。

彼は私を求めてくれたのだという気持ちが嬉しくて、知らずに涙を流していた。

「杏奈、泣いてるの？」

ギルバートがちょっと驚き、愛撫の手を止めて不安そうにいう。

「ごめ……、なんだか嬉しくて」

私がそういった途端、ギルバートが私を愛する手を再開した。

今度は情熱的に抱きしめられ、耳元で名を呼ばれる。

「杏奈、好きだ、好きだよ」

そしてそのまま耳朶に、首筋にときつい口付けを与えられた。

私は息を呑んでそれに応えた。

ギルバートの手が部屋着の下にするりと入ると、私の体の柔らかいところを愛撫しにかかった。

素肌にじかに触れる手は、温かくて、滑らかで、力強く溶けてしまっそうだった。

どうしよう、このままだとこの人に溺れてしまう。

いつも本気の不器用な恋しか出来ない私は、この人にのめり込んでしまう。

ああでも、この手はとても気持ちがいい。

もうパイプベッドのきしむ音も気にならないぐらい、私はこの人に溺れ始めている。

そうしてそのまま私とギルバートは一夜を過ごしたのだった。

温かい。

気持ちがいい。

ゆるゆると拘束されるこの感じ。

まだ寝ていたいな。

そう思ったときに、頭上に柔らかな口付けが落ちた。

ちゅっと音を立ててされたそれは、昨日の情事の穏やかな名残があった。

「お、おはよう」

ギルバートの腕の中で、少しだけ恥らいながらいう私。

彼はそれすらも愛らしいといった風情で抱きしめてくる。

ギルバートは私を抱いたままごろりと仰向けになった。

「おはよう杏奈。杏奈の顔をもっとよく見せて？」

私はギルバートの滑らかな胸板に顔を突っ伏した。

「寝起きの顔は不細工だから、見られるのは好きじゃないの」

「その杏奈が不細工だと思っている顔をとても愛らしいと思っている俺はどうすればいい？」

「もう、馬鹿」

ギルバートの目を、両手を伸ばして封じると、私はギルバートの頬に口付けを返した。

そうしてそのまま二人してくすくすと笑う。

穏やかな時間だった。

朝食はスクランブルエッグと牛乳、パンと生ハムサラダにした。

2人で朝食を食べながらどちらからともなく微笑む。

その日は家から一步も出ず、ゆったりとした時間のなかで時を過ごした。

次の日の午後、もう一度渋谷に行ってみようということになった。

「なんだかあの場所が気になるんだ」

そういったのは渋谷の八千公前。

そこで佇んでいると、ほどなくして声がかかった。

「お兄さん、モデルなんて興味ない？」

スカウトを軽くあしらうと、ギルバートと私はなにかを待つかのよう  
にその場に佇んだ。

「ここで、ギルバートのことを知っている人に出会えたらいいね」

「ああ。俺も元は自分がどんな奴だったのかは知りたい。でも、杏  
奈をおいてまで知ろうとは思わない」

そういうとギルバートは私の手を強く握りしめた。

昼も過ぎたころ、いつも通り、渋谷には人がごった返していた。

人いきれに少し酔ってきたころ、ついにギルバートを知っているも  
のが現れた。

「ギル、お前、こんなところにいたのか！ ようやく見つけたぞ！」

見ると、そこにいたのは白髪の偉丈夫だった。

灰髪と白髪。

やっぱりこんな奇抜な格好をする辺り、バンドのメンバーなのかし  
らといぶかしんだ私に対し、ギルバートはその人に声をかけた。

「すまない、俺はあんたのことを思い出せないんだ。あんたは誰で、  
俺のなんだ？」

そう聞かれた相手は驚きの表情を見せず、むしろ「ああまたか」と

いった表情をした。

「俺はバンド・メリトウスのギターでガルディン。つたく、次のイギリス公演に間に合ってよかったぜ、心配かけさせやがって」

「どういうことなんですか？」

思わず聞いた私に、ガルディンと名乗った偉丈夫は私の存在に気付くと、深々と頭を下げた。

「あんたのことは調べさせてもらった。こいつを大事に匿っていてくれたんだってな。恩に着るぜ」

そういうと、ガルディンはぽつぽつと事情を話し始めた。

「俺ら昔にバイクで事故ってな、俺達の髪の色はその事故の後遺症で色素が抜け落ちちまったんだよ。それにこいつ、たまにこっやって記憶喪失になるときがあるんだ。たいていバンドでのストレスなんか原因なんだけどな」

「そうだったんですか……」

「なにはともあれ、こいつが見つかって本当によかった。バンドのヴォーカルがいないんじゃない、話にならねえところだったからな」

じゃあ、やっぱりギルバートはバンドの一員だったんだと思う私は、必然的に、ギルバートとの別れを察した。

「こいつ、俺達のことや自分のことは忘れても、自分が作った歌だけは忘れないんだぜ」

だから助かってるんだけどなといったガルディンは、ちらりと腕時計を見ると、はあ、とひとつため息をついた。

「もうお別れの時間が来たみたいだ。あんたのところには、あとでそれ相応の額の謝礼を振り込んでおくから、心配しないで欲しい。その代わり、こいつは返してもらおうぜ」

そういうと、ガルディンはギルバートに手を差し出した。

「ほら、行くぜギル、あんたにはイギリスで数百万人のファンと、それからお偉いさん方が首を長くして待ってるんだぜ。あんたも歌いたがっていただろうが、あの舞台でな」

そういつてやや強引にギルバートを引っ張ると、ガルディンは私に對してもう一度頭を下げた。

「こうなる前のこいつはバンドの方向性でお偉方と激突してちよつと荒れていてな、とてもステージに立たせられたもんじゃなかった。それが今は本当に穏やかだ。これなら次の公演にも十分耐えられる。こいつを正気に戻してくれたのもあんたのおかげだ」

そういうと、私を何度も振り向くギルバートを引っ張って、ガルディンは雑踏の中に消えていった。

私はその場で立ち尽くしていた。

「案外あつけない終わり方だったわね」

そういつて、スカートのほこりを払うと、私はもと来た道を引き返

し、家に帰ったのである。

それからの連休は何事もなく過ぎていった。

部屋の片づけをし、掃除洗濯をして彼がいた痕跡をこの部屋から追い出した。

メンズ用の服はどうしようかと迷ったけれど、やはり捨てることにした。

この先、私の周りで使うことはないだろうと思ったからだ。

彼がいた痕跡を一切合財片付け、部屋もなにもかもをぴかぴかに掃除すると、私は綺麗になった部屋の真ん中で呆然と佇んだ。

「あーあ、終わっちゃったな」

そういつてもなんだかしっくりとこない。

今までの約1週間のほうがまるで現実感のない夢のような日々であったのだと思うのだ。

「私には過ぎた存在、だったわよねえ」

そう、まるで夢から突然現れてきたような存在だった彼。

今まで洋楽やバンドなんかには興味がなかったけれど、今度聞いてみようかなと思った。

「でも、そしたらこの自覚のない傷口をえぐるかな？」

そう呟いても涙は出なかった。

連休が終わり、うだるような暑さの中、またいつも通り仕事が始まる。

もう朝のラッシュで守ってくれる人や、会社帰りに重いスーパーの袋を持ってくれる人はいない。

そんな当たり前のことが、なんだか地味にボディーブローをかます。

「思い起こせば、彼は私を守ってくれた、ナイトみたいな存在だったのよねえ」

そんな日々を過ごしていたある日のこと。

ぐだぐだの休日を過ごしていた私の元に、小包が届いた。

「なにかしらこれ……まあ！ 海外からだわ！」

おっかなびつくり封を解いてみる。

そこに入っていたのは、2枚のDVD・ROMだった。

小包の中には、それらのほかに手紙が入っていたので、それを開けて読んでみた。

それはガルディンからだった。

「親愛なる杏奈様へ

この手紙がギルからじゃなくて申し訳ないということを先に詫びておく。

実はあれからギルはまたストレスのせいで記憶を失ってな、今度はあんたがらみさ。

イギリス公演が終わったあと、あんたの元へ戻るって駄々をこねて、またお偉方とひと悶着あって、それでペア。

今は医師の元で安静にしているから、大事無い。

けれど、あいつの記憶はまた綺麗さっぱりなくなっちまった。

俺達は何度も忘れられているから痛みは少ねえが、あんたにとってや初めてのことから負担も大きいだろうと思ってこの手紙を書くことにした。

ギルを最後まで面倒見てくれたのはあんたが初めてだったから、この手紙を書くことと思っただぜ？

日本人てのは優しいのかねえ。

あいつはこっちが恥ずかしくなるぐらい『杏奈は最高だ』って惚気てたぜ。

あんたはあいつにとっては、最初で最後の最高の女って奴だったの

かもしれないな。

俺も出会ってみたいもんだぜ、その最高の女って奴に。

おっと、話が逸れたな。

その小包に入っているものは是非あなたに見て欲しい。

あなたのことを忘れても、あいつは心の深いところであなたのこと  
ずっと想ってるってことが伝わってくるものだけ。

それじゃあな、元気で。

ガルディン」

私はその手紙を読みおわると、2枚のDVDを両手に持った。

右手には「イギリス公演」と書かれたものが。

左手には「ANNA」と書かれたものが。

私はまず「イギリス公演」のほうを見てみることにした。

パソコンにDVDをセットし、起動する。

そこに写っていたものは、圧倒的なバンドパフォーマンスを繰り広  
げるプロ集団の公演だった。

プレイヤーと観客が一体となって、怒涛の熱気を作り上げる。

その中で声を枯らさんばかりに叫び、歌い上げているのがギルバートその人だった。

私はDVDを見ているうちに鳥肌が立ってきた。

彼のパフォーマンスに何度も身震いをした。

こんな底知れぬパワーを秘めていたのか、ギルバートという人は。

その公演は大歓声の中幕を閉じた。

イギリス公演のDVDはそれで終わっていた。

鳥肌が治まらない中、私はもうひとつの「ANNA」と書かれたDVDをパソコンにセットし直した。

DVDを起動する。

そこに映っていたのは、手持ちのハンディカムで録られたような、少し荒めの画像だった。

椅子以外は何もない空間。

その空間に突如人が現れた。

「ギル………！」

そこにはギターを持ったギルバートがはにかみながら現れたのだ。

「えー、親愛なる杏奈へ。杏奈に捧げる曲が出来たので聞いて欲し

い。タイトルはそのものずばり『ANNA』。出会った最初のときにいい名前だと思ったから、杏奈の名前を使わせてもらうことにした。いいよね？」

そういうと、ごほんと咳払いして、ギルバートは「ANNA」を歌い始めた。

アコースティックギターに合わせて、ギルバートが朗々と、切々と「ANNA」に対する恋の歌を歌う。

先ほど見たDVDに登場していた同一人物とは思えないほど、彼の歌は穏やかで慈愛に満ちていた。

「例え君のことを忘れても、心の深いところでは君のことをずっと想っているよ」

英語の歌詞にその一文が出てきたときに、私は耐えられなくなって号泣した。

「うっ、あっ、ギルっ……」

涙が止まらない。

だって、この歌は、ギルバートからの恋文。

私だけの、私だけに宛てた恋文なんだもの。

それから、歌が終わり、DVDの画面が真っ黒になっても、私はその画面を見つめながら、いつまでもいつまでも泣いていた。

泣き疲れ、あたまがくわんぐわんと痛くなったところ、私は床に仰向けになった。

目の前はぐじゃぐじゃで、ティッシュは何枚使ったかわからない。

とても見れたもんじゃない、酷い顔だと思った。

「寝起きの顔は不細工だから、見られるのは好きじゃないの」

「その杏奈が不細工だと思っている顔をとても愛らしいと思っている俺はどうすればいい？」

そのやり取りを思い出して、また涙が溢れてくる。

「ギル……」

でも、ギルバートは私に歌を残してくれた。

例えば記憶がなくなっても、私のことを忘れても、心の深いところでずっと忘れないギルバートの想い。

「私はどうしたらいいだろう？」

ギルバートを追ってイギリスへ行く？

でも、現実問題として、そんな気力はない。

煩雑な手続き、通じない外国語、そして確実に忘れられているであろう自分の存在。

しり込みをする要素は十分にあるし、もうすべてを捨てて海外へ行くほど若くもない。

「じゃあどうする？」

答えはひとつ。

辛くても、理不尽でも、神様を呪いたくなくても、私は前へ進むしかないのだ。

「そう、それはいつも通り、明日も会社に行くこと」

そしていつも通り仕事をして、いつも通り家事をして、いつも通り就寝する。

それが今の私に出来る精一杯の愛情表現。

それでいいよね？ ギルバート。

私は心の中に仕舞おう、彼との大切な時間を。

思い出すのは辛いから、そっと鍵をつけて。

そう、これは私の、大事な大事な宝物の話。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5219m/>

---

銀色の狭間 （パラレル）

2011年4月16日08時33分発行